■日時：2021 年 6 月 27 日（日）
■場所：小高伝道所
■説教者：飯島信牧師
■説教題：「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。」
■聖書：マタイによる福音書 6：25－34
■讃美歌：7「ほめたたえよ、力強き主を」・461「みめぐみゆたけき」・505「歩ませてください」

先週の日曜日、私は 2 回目のワクチン接種が終わり、副反応を心配していたのですが、ほとんど何もなく、今日に至っています。

若い体ほど発熱やだるさなどの副反応が顕著に出ると聞いていましたので、ほとんど何もなかった私は、肉体的には余程高齢化が進んでいるのかも知れません。

1 回目の接種から 3 週間を経て 2 回目の接種となり、2 回目の接種から 1 週間ほどで十分な免疫が出来るとのことです。1 週間経ちましたので、何とか免疫が出来たのかも知れません。しかし、油断することなく、出来る限りの注意を払いつつ、生活して行きたいと思います。

それでは、今日与えられた御言葉を見てまいりましょう。

イエス様が語られた山上の説教として知られている第 5 章から 7 章までの一部ですが、この箇所は、その中でも特に注目すべき内容の一つであると思います。

まず 25、26 節です。

２５：「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

２６：空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値のあるものではないか。

25、26 のこの 2 節で語られているキーワードは、命、体、そして価値と言う言葉です。さらに価値と言う言葉と深い関わりを持つのが続く 27 節の寿命です。寿命とは命の限りを意味しますが、27 節も読みます。

２７：あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

つまり、25 節から 27 節で、イエス様が人々に問題にしているのは、あなたがたの命や体は誰のものであるのかと言うことです。人がもし、命や体は自分の物であると考えるなら、その事での思い煩いから解放されることはありません。

しかし、イエス様が人々に語られているのは、私たちの命や体は、自分たちの物ではなく、神様の物であることです。そのことは、命に対する神様の絶対的な肯定、即ち祝福です。全ての人の命は、その始めより終わりに至るまで、神様の御手の内にあり、そのことを信じなさいと言うのです。

生まれ出で、御許に召されるまでの命の限り、それは神様が決められます。

ですから、28 節から 30 節です。

２８：なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。

２９：しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

３０：今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。

私たちは神様によって造られ、神様によって命を与えられました。

そこには、「生きて良いのだ」と言う、神様からの絶対的な肯定があり、祝福があります。つまり、私たちが生きることも死ぬことも、全ては神様の支配のもとにあるのです。

神様が、この私に、なお人生の道を歩むことを許されるのなら、私が生きるに必要な食べ物も、衣服も与えて下さいます。又、神様が私に、それ以上人生を歩む必要がないとお考えになるなら、生き永らえるに必要な食べ物も、衣服も必要ではなくなるのです。

私たちが生きることも死ぬことも、全ては神様の御手の内にあることを、空の鳥や野の花をたとえに用い、語られました。

そして、31 節から 33 節です。

３１：だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。

３２：それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。

３３：何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

「何よりもまず・・・」。

この言葉は重要です。

自分の命は神様の御手の内にあることを知った私たちが、それではどのように生きるのかをイエス様は教えられました。

全てに先駆けて私たちが望み求めるもの、それは、食べ物でも衣服でもなく、神の国と神の義であると言うのです。

神の国とは何でしょうか。

それは、世の権力者ではなく、神が支配されている国です。

神の義とは何でしょうか。

それは、私たちが考える正しさではなく、神の正義です。

何よりもまず私たちが望み求めるもの、それこそが、神の国と神の義であると言うのです。

一体、このことは何を意味しているのでしょうか。

私は、実は、この箇所は初め、私たちが生きている世界、つまりこの世に神の国が造られ、神様の正義が実現することを祈り求めることであると思って読んでいました。

しかし、今日の説教を準備する中で、ふと思ったのです。

イエス様が言われている、まず神の国を求めなさいと言うのは、自分の心の内に神の国を迎え入れることではないかと。

神の義を求めよと言うのは、心の内に神様の正義を迎え入れることではないかと。

言い換えるなら、不正や不義がはびこり、闇に包まれたこの世の生を生きつつも、心の内に神の国を迎え入れ、心の内で神様の正義に与る者となりなさいと言うのではないかと。

そのようにして、今日と言う日を精一杯に生きなさいと言われているのではないかと、そう思えたのです。

神の国、それは、私たちの心のただ中にあるとイエス様は言われました。

神の国に生きるとは、今日と言う日を力の限りに生きながら、全てを御手に委ねることです。神様に任せてしまうことです。

努力をしつつ、懸命に生きつつ、しかし、心の最も深いところで、自分の生と死は御手の内にあることを祈り、信じることです。それが、神の国を迎え入れることです。

神の義を求める、それは、正義を求めて戦いつつも、義と不義の最後の裁きは神様の権限であることを受け入れることです。正義を求めつつも、自分を絶対化して自己の正義に囚われることなく、常に自らを問い、神様の前にあっては被造物であることを自覚しつつ、神様によって世が導かれることを祈り求めることです。

34 節です。

３４：だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

しかし、神の国を受け入れるには、ほど遠い自分の現実を知らされます。

思い煩いの虜（とりこ）になっている自分の現実を知らされます。

又、神の義に与るのではなく、自分勝手な正義を求めてしまう自分を思い知ります。

しかし、そのような私に、そして私たちに、それでも神の国と神の義を求めて生きることをイエス様は呼びかけて下さいます。

何故なら、私たちは、心の内に神の国を迎え入れ、神の国に与る者として造られたからです。そして、私たちがそのように造られた者であることを知り、人生の日々の歩みは全て御手の内にあることを信じて生きる時、私たちは明日への思い煩いから解放され、心の平安が

与えられるのです。

この小高の街で、どのような伝道が出来るのかを考えます。

教会を訪れる人を待つのではなく、街に出て行って、呼びかけ、招き入れることを考えたいと思います。

そのためには、まず、この街の住人となることです。

この教会に人が住み始めたことを地域の人に知ってもらうことです。

そのためにも、月に一度の限られた時間ですが、少しずつでも滞在時間を増やすことが出来ればと願っています。

この街に住む人々は、３・１１以降、どのような思いで人生を歩んで来られたのでしょうか。

それぞれの思いは違っていると思いますが、それでも何を課題として生きていらっしゃるのでしょうか、

そして、どのような街の再建を願っていられるのでしょうか。

明日に向かってのその歩みを知りたいと思います。

教会の礼拝の明りを灯し続け、教会の扉を開け続ける中で、地域の人々との関わりを築き始めることが出来ればと願っています。

幸いに、佐久間さんからいろいろと教えていただけます。

又、教会の周りには、いろいろなお店が立ち並んでいます。

隣りにはスナックがあり、すぐ後ろには魚屋さん、そしてお寿司屋さんもあります。

教会の前には、多くの人々が訪れるコミュニティーセンターがあります。

教会の入り口の小高幼稚園の看板は、かなり目立ちます。

このような与えられた環境、備えられている道具類を生かしながら、皆様と共に、小高伝道所がこの地に立てられた神様の御心を尋ね求め、神様がなさろうとしている御業に与る者となりたいと思います。

祈りましょう。